

AIとは？－ 最初の一歩で分かったこと

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

経済、社会、技術—あらゆる分野で、AI（人工知能）は、未来を語るときのキーワードとして登場する。「AIが人間に代わって～する」というフレーズが巷に溢れている。

そこで私も、素人ながらAIの正体を少し探ってみようと思いついた。予想通り、書店やネット上には、AIの解説書や入門プログラミング言語Python、スクール・セミナー情報などが盛り沢山であった。エネルギーの充満している分野であることが肌で感じられた。既にご存知の方には気恥ずかしい限りだが、AI初学者の気付きを、企業経営者の目線で3点述べてみたい。

1点目

AIが導く結論は、必ずしも最も正しい答えとは限らない

最近、「ヒューリスティック」という言葉をよく耳にする。ベストな解かどうかは検証されないが、手軽に得られる満足の行く解という意味で使われる。こうした実用性に富んだ柔軟な発想が、AI活用の根底に存在する。人間は間違えることがあるが、システムは絶対間違える筈がないというIT時代の常識からは転換が必要である。

別の言い方をすれば、従来のITは、唯一無二の正解がある世界でしか使えなかった。それが、AIの登場により、論理だけでは解を導けない世界にまでシステム化の範囲が広がったということである。

2点目

AIシステムの導入によって得られる成果は、地道なカイゼンの世界である

ある専門家は、自ら開発したAI活用型自動販売機の効果を+2%と測定していた。この数字をどう受け止めるかにもよるが、AIに期待することは、決して画期的な新発明ではないことは心しておく必要がある。

AI活用が一般化すればこの効果はもっと小さくなる訳だが、競合他社が皆AIで武装化する中で、旧来の戦法を続けていると、その差が致命傷になる可能性もある。強力な武器の出現によって、より熾烈な戦いを強いられる時代になったと覚悟するしかないのだろう。

3点目

AIシステムの開発には、制度や慣行への理解が決定的に重要であり、その道のプロである経営層の強い関与が必須である

AIというと、大量のデータさえぶち込めば勝手に答えが出てくるというイメージがあるが、その開発には、裏側で動く学習技法をいかに駆使するかがカギとなる。私は30年ほど昔、マクロ経済分析の一担当者として、今で言うデータサイエンティストのような試行錯誤の経験をした。過学習の防止法やデータクレンジングなど、ここまで手法が確立したことには隔世の感があるが、同時に、どんな問題を解決したのかは容易に理解できる。

AIを司る機械学習・ディープラーニングの手法は、どこか古来の格言や諺に通じるような知恵であり、人間が営む判断全般に応用できる洞察の集積である。AI時代の一般教養として、知っておいて損はないように思われる。

最後に、AI化されたサービスに向き合う消費者の立場からも、一言述べたい。

技術進歩の速さには目を見張るものがある。ひと昔前の自動翻訳ソフトを試して敬遠した人にも、最新バージョンで再度トライすることをお勧めする。と同時に、人とシステムの協業を念頭に、それを使いこなすテクニックを磨くことが大切だ。例えば、自動翻訳であれば、英単語を覚えるよりも、5W1Hを明確にした正しい日本語を話すクセを付ける方が、円滑なコミュニケーションへの近道となる。

AIは恐ろしく勉強熱心である。新たなデータを取得するたびに、学習を繰り返して、精度を高めていく。人間もまた、昔のデータで作られた習慣に凝り固まってしまうまいよう、日々新たなデータを拒まず取り込み、謙虚に考え直すことで、脳の思考回路を更新していくことを心掛けたいものである。